

### 祭りの意義

祭すなわちまつりと申しますのは、広い意味でいえば十分に釣り合う、相手と自分とが融和した気持ちになる。あるいは相手と自分との間に一つの線が通じて、その線がピンと張りきっている状態で、まは全い、つは釣り合うことで、まつりというのは、ただ神さまと人間との間においてのみのことではなしに、左右のあいだ、人間相互の間にもまつりはあるべきであります。お互いの間にまつりが十分できていないというと、融和した気持ち、幸福な生活、その日その日を楽しんでゆく調和の状態というものは世の中にあり得ないのであります。何が大事というて、これほど大事なものはない。まつりがほんとうに行われなくては幸福はこない、調和はこない、平和はこない。

みなさんは、単にお宮を造ってお供えして、のりとをあげるとか念仏をあげるとか、そういう形式的なことをまつりと思っておられる方があるかも知れませんが、それはごくせまい意味のことでありまして、広い意味ではこのまつりは前後、左右、上下、ななめ八方に行われていなくては、ほんとうの安心立命というもの、また統一した幸福な世の中というものは出来てこないのがあります。

これは一身でもそうであります。一身の頭と腹とのまつりができていないと、その人はしっかりした人ではない。また肉体というものと霊魂というもののまつりが本当にしっかりできていなくては、その人は完全な働きはできない、向上発達は遂げ得ないのであります。家庭においても、主人を中心として家族にほんとうのまつりができていなくては、しっかりした愉快な生活はできないのであります。また人類として自然現象、植物、動物あるいは周囲の山川、そういうようなものとまつりができていなくては、この世はうまくゆかない。そういうふうには、まつりというものは、簡単な何でもない形式的なことのごとく考えているのは大きな間違いである。

さて、大体において天地はチャンとまつりができている。たとえば大太陽を中心としてもろもろの太陽界が回転しており、各太陽界においては太陽を中心としてそれぞれの遊星がまわっており、一つのここにまつりができている。その距離は一定しておいて、お互いに引きつ引かれつとして影響し合っている。

動物と植物においてもまつりができておいて、植物のないところへは動物は棲みにくい、植物はまた動物に保護され、媒介されるので繁殖してゆき、向上してゆく。植物の吐く息、動物の吐く息、これはお互いにおぎない合って、炭酸ガスと酸素はどちらも、その出すものが肥料になり、薬になっている。鉱物と植物もそうである。

大体においてそういう見方をしてゆけば、一切は本当の意味でまつりができているから生存してゆき、あるいは発達を遂げてゆくのであって、まつりがなかったら一切は壊滅してしまうのである。ただ人類社会はほんとうの自然の生活をはばみ、神を拒否し、人間的理智にはしりすぎる結果、人間社会には、このいちばん大事なまつりということが、一番おろそかになっているのであります。これをまず正してゆかなくては、世の中は良くなるはずはないのであります。

まつりにはどうしても中心がなくてはいけない。同じような質量のもの同士ならんだところで、変化がな

く調和がなく統一がない。一切のものを見てゆけばことごとく中心があり、中心からの距離がある。それが正しくキチンと行われている時に、社会は一番おもしろく強く機能を發揮することができるのであります。しかし私は、そういうあまり広い意味のことばかり申し上げておりませんから、狭い意味で上と下のまつり、つまり神霊との和合、それをすこし申し上げてみたいと思います。

## 神霊との和合

一般に行われている狭義のまつりはこれをいいます。

すべて中心がなくては組織はない、保たれない。簡単なものにも中心があるということは、おわかりのことと思いますが、大きい大宇宙にも中心がなくてはならぬ。国家にも中心がなくてはならぬ。大宇宙の中心は神さまであります。

とにかく神霊との和合ということが、いちばん人生には大事なことであります。ところがこの神霊との和合ということ、ほんとうにやろうと思えばなかなかむつかしい、ただ祝詞をあげたり経文を誦してウジャウジャ拝んでいるのがまつりであれば、これはいたって易いのであります。これは本当のまつりに到る一つの道程であり、稽古であり、型である。ほんとうの神を感じ神に触れ、どんな場合になっても、その信仰がゆるがずに神さまとまつり合って融和している。こういう情態にはなかなかにくいことであります。しかしながら、神さまがあるから神さまを感じるのでありまして、神さまを感じる人は昔から今まで、その差こそあれ、とにかく絶えないのであります。それは実在しているから、事実であるから、とにかく、そういうものの力を感じるのであります。

古来、宗教上の教祖とか開祖とかいう方は、学問があつたがためとか、門閥地位があつたからというのではない。ただ徹底した信と業の人であつたがためであります。理論から、あるいは智慧からというのでなしに、その人の至誠至心、すなわち神さまの心になかう心が、神を感ぜしめたのであります。

人生、神霊とまつり合わなくては真に後世へ残るような大きな仕事はできません。かえつて世の多くの位ある人、金ある人は世の中を毒しておる場合が多い。わが大本開祖出口直子刀自につきましても、田舎の紙くず買いのお婆さんでしたが、しかしその人の残した仕事、与えた感化というものは実に大きなものである。決してこの人の知恵や技量や、そういうものが人をひきつけたのじゃない。その人が媒体となり柱となって受けたところの光というもの、熱というもの、神さまから享けた、自分でもわからん何かの大きな力、説明のできんあるもの（これは直接に受けねばだめであります）が人に迫つたのであり、人をひきつけたのであります。

かなしいかな、いまの学問では五感以上はわからん、六感七感というものはわからん。ところが、人間は目をつぶつており耳をふさいでおつても、ある場合には何か感ずるといふことがある。直接にわかるという一つの大きな作用があり感応がある。神さまと真釣り合う上においても、すくなくも肉的五感を超越した感応ということに留意せねばならぬ。これがいちばん大事である。物の形を知るにも、触れるとか見るとかする、音をするには耳をかたむける。神霊を感じるためには、器官的にいへば腹を向けることを必要とします。

腹には五感以上の感覚があるのです。そういう神経の働きが腹部にある。交換神経（植物性神経）叢というものには腹部に集中している。腹が立つのでも、あるいは何か力を感じるのでも最初は腹にくる、頭にくるものではない。腹が立つのは普通みぞおちのあたりが興奮して緊張するのである。あるいは何か真剣になると

きには下腹が自然に張ってくることもある。とにかく、五感によって神霊と通じようとするよりも、腹によって通じようと意を用いる方が効果的なのであります。

ほんとうの神さまとの真釣り合わせ、融合ということも、決してただ時を定め形式をきめて、それによって拝むことにのみよって得られるのでなくして、前にもうしましたように、真のまつりは常住坐臥、二六時中行われるべきものであります。

中には、自分は何年来信仰にはいつて祭りを大分やったが、ちつともおかげがないというようなことをいう人があるが、それは本当のまつりをやっているのではない。そんなことをせんでも、二六時中、神を念じ神にかなうような行動をしている人は、それがまつりをしている人である。それが根本である、大事である、平素にある、ということはおわかりと思います。

しかしながら、はじめから対象なしに、形式なしに、戒律なしに、そういう小乗的境地を通らずに直ぐ真のまつりができるという人は、それは天才的な人か特別の人でなければ、むつかしいのであります。先生につかずに文字がわかり、学問がわかるといふ人は特別な人でありまして、普通は型からはい、形式からはい。その方が要領のみこみやすい。そこに神壇を設ける、宝座をつくる、神さまのお在になるところを造るといふことは、何もつくらずに拝むよりも自然であり、気持ちがそういう気になりやすい。

神さまはどこにもおられる方であるから、何もそういうことはしなくても良いようにいう人があるかも知れませんが、やはり相対的にそういう物を造る、神さまに対する呼鈴をつくり窓口をつくる、その方がしっくりくる。寝ころんで拝んでもまつりをしていふことになるというが、それはよほど大乘的な人、そういう態度でも念力がとどくような情態になり得る人ならばよいが、やはり一般には像なりに靈気の一部がとどまってくる。お宮は看板だけでなく、お宮そのものには普通の家とは違った大気があり、雰囲気があり味わいがある。だからお宮に行った時には一種の違った気分がある。お宮はお宮、寺は寺、また一軒一軒でも何か変わった気、エーテル体、靈気というものがあります。六感以上の感で感ずるのであります。

### 幽齋と顕齋

それで日本の神道では、昔から祭を幽齋と顕齋と二つに分けております。つまり体的な対象なしに、あるいは形式なしに神に対する、これは幽齋です。

顕齋は、ある一定の儀式にしたがってお祭りをする事です。神さまの宮をつくりお供えをする、あるいは朝晩のお礼をするといふことは、これは簡単なことでありますが、人間がより以上のものに対し、また大きな力に対する感恩奉仕の稽古にふさわしい態度であります。形であります。また神さまといふものとの親しみがつきやすい。そういう形の上からの儀式をし、お詣りをするといふようなことは、自然に自分が神さまへ近づいて行ったような気になります。

つぎに人間からのまつりの対象は大宇宙のいちばん元の力、統率している意志、大元霊、日本の皇典でいえば天之御中主之大神、それがほんとうの対象であります。それと同時にいろいろな対象がある、八百万ある。天祖があり、また国祖がある。またその地方地方の国魂の神があり氏神さまがあり、また各家には先祖の霊というものがある。つづめれば一神に帰するのであります。ひろげれば八百万である。しかもそれには区別がある、階級がある。稲荷さんを拝むよりは伊勢の大神宮さまを拝むには、拝む気持ちを変え形式を変えねばならぬ。それだけやはり位が違う。その差別を誤ると迷信になりやすい。が、直接の対象が

つぎに変わってもかまわない。(究極にゆけば無論一つであるが) 特にはじめのあいだは、独一真神大元霊、そういうような絶対の中心の神さまを拝もうとしても漠然として、なかなかどうという気持ちで、どうしたら通ずるかかわからぬ、頼りない。それよりも目の前にある氏神さまか、その地方の神さま、国の親さま、直接親しみやすい神霊に対した方が、案外、すすんでゆく上において得るところが多いこともあるのであります。が、しかし、それで止まってはいけない。またその順序を間違ったり、石とか木とかを一生懸命拜んで、天祖、国祖を拝むことを忘れていては本末転倒であります。

### 祭政一致

より以上のものから流れてくる幸いによつて魂が増え、世の中が栄えてゆくのでありまして、個人としても国家としても、まつりということがいちばん大事であります。まつりをして、それから流れてくる思想、力というものをそのまま行動にあらわすこと、それが生活であります。宗教と生活は別々なものではない、裏と表というようなものであります。ただほんとうのまつりが現代に少なく、したがって本当のまつりごとが行われがたいのであります。国家としても、まず天祖、国祖を祀り、それぞれの国魂の神をお祀りして一般の人々もその気持ちになり、はじめてその幸いを受けてゆくことができ、人間の智慧を超越した栄えができてき上がつてゆくのであります。特に日本はまつりの国であります。まず祭をしてそれをおよぼし、そのままに祭の気持ち、光、流れというものを国の政治におよぼすのが政であります。これは離ればなれのものではない。ところが現在は、悲しいかな、逆になっている。逆になっているどころか、却つて祭ということが廢れている。いわゆる生活という第二義的なものにのみ一生懸命になっている。これではいけない。祭を行つて、はじめてほんとうの政ができる。祭政一致、これは広くいつても、また個々についてもそうであります。そうでなければ本当に落ち着いた生活、天地と調和のある考え方、あるいは歩み方というものではないのであります。それがないから世の中は行きづまりがあり煩悶があり、どこかに無理があり矛盾がある。

嬰兒などは案外大人よりもまつりができている。したがって、する所作にも無理がない。いくら腕白でもそう無茶なことはしない、またそう大した怪我もしない。純であるから自然に、周囲にある純なる気を集め、それに導かれている。が、かえつて大人になり、また文化が横道の方へ進むというと、それに災いされて人間が主になり、愛より智が先になり、人間的理屈が大きな天地の理屈より先になる。だから、それに執着しているとわからなくなる。天地とともに、神さまとともに生きる、これはまつりに先ずよらねばいけない。ということになるのであります。

ほんとうにまつりができている人には教えはいらぬ。何となれば、教えというのは真理を言いあらわし、これを行わしめようとするもので、ほんとうに神さまと通じておれば、教を離れた生活はできないから、真理をはずれた無茶なことはやらないわけです。

法律でも、善のみであれば法律はいらぬ。何百万円でも証書なしに貸し借りができる。法律が完備しているのは乱れている証拠である。理屈を引っぱり出すのは末である。話をせず心得のゆく人、そうならねばならぬ。教えというものは祭からいえば第二義的、第二段であるということを示したのであります。

### 教の意義

日本ではこれをオシエといいますが、オシウは「緒強う」である。オは魂の緒で靈魂のこと、教というのは悪い方の魂の緒をだんだんと強いて良くしてゆくという意味であります。これは、悪い方を純化してゆく向上的な手段であります。

漢字の「教」は孝文と書きますが、文はあやなり、交わりなり、発展なりで、道徳でいちばん基礎的なものは孝である。つまり親子の愛がいちばん人間に徹底してわかりやすい。その気が普遍的に全体的に拡げれば教ができてゆき、世の中はよくなる。そういう意味から、孝という字に文という字が一緒になっているのです。

西洋では educate 引き出す、ということが教育という意味になっています。引き出すというのは神性がすべてのものに備わっている、ただそれが覆われているだけである。神さまから与えられた性、良い方のもの、純なるもの、そういうものを引っぱり出すのが教である。そういうふうになっているのであります。とにかく、靈魂をより良くしてゆく上の一つの理論である。

われわれの方からいえば、天授の真理がほんとうの教である。人間的なそれには間違ったのがある。現代の教育のようなのはそうであります。たいへん教育が盛んになったが、役に立つ者ができぬ。それは天授でないからであります。神慮を受取る人、神慮との和合ができる人の教が根幹をなさねば、ほんとうの教にはならない。ただ知識を持っているとか、智慧のある人とか、人間的理智の発達している人とか、そういうのは幾ら勉強し合っても相談し合っても、かえって変なものになりやすい。本当の教というものは天授の真理である以上、より以上の力に触れ得る人、まつりのできる人、そういう人の言ったことが本になっているものでなければ、ほんとうの教でないということは明らかである。今の世が行きつまっている、今の教育がどうも腑に落ちないというのは、天授の真理であないからであります。その教えの中で、いちばん大切なことを三つほどお話してみたいと思います。

## 一、 感恩

いろいろ理屈を知ったり言葉を覚えるのは、これは末の末のことです。いちばん大事なことは、愛というものは、どういうものであるかということを知ること、ありがたいということは、どういうことであるか、誠というものはどういうものであるか、どういう力があるか、そういうことを知ることがいちばん大事である。いくら七むつかしい哲学を説き理論を説いたところで、それを使う道が知らねば、これは逆になつてはいけないのであります。で、教が徹底しなくては行為も徹底しない、徹底さし得ない。であるからして、まつりが徹底しないにしても、この教というものだけは徹底させたいものであります。

愛の一番わかりやすいのは忠孝であります。現代の教育は理屈っぽく、忠孝を教えこむ迫力がない。主に忠、親に孝でない者がいくら世の中に出て何ができるものですか。いくらものが出来ても、神心がなく徳がつかない。また奉仕的な犠牲的な気持ちにもならない、統一的な人にもならない。一口にいえば感恩ということを教えねばならぬ。このためにはあくまでも鍛錬教育、勤労教育でなくてはなりません。

## 二、 鍛錬

ほんとうのものを作り上げようとするには、それだけ苦しまねばならぬ、それだけ鍛錬されねばならぬ。今の考え方は楽に大きな所得を得たいという安易な考えが非常に流行しております。ほんとうのものを作り出すには、ほんとうの苦しみをしなければいけない。今のように、親の脛をかじって遊び半分でものを教えられ、ならっているようなことでは、魂にしみ込んだ何物も得られない。人間を浅薄な浅いものにしてしま

う。実地にぶつつからねばものが身につかない。

今は知ることだけに一生懸命、頭だけ豊富にしているが腹ができません。物でも事でも人でも、鍛錬されたものでなければ本当のものにならぬ。鍛錬の途中においてはバカげたこと、損をしたように思うこともある。しかし苦勞せず、うなぎ登りに楽に登ったようなものはダメである。また登り得ようはずはない。感恩を情とすれば鍛錬は意である。今はこの二つとも非常になおざりになっている。

情の教育、これがだんだん冷たく薄くなっている。これは一つは鍛錬ということをやらさぬからであります。水は自然に湧くもの、お日さまは勝手に照るもの、親は勝手に自分を生んでくれたもの、米も麦も自然に生ったもの、そういうふうには、何でもありがた味というものを持たない、恩に感じない。苦しんだ覚えがないから、物をつくった覚えがないから。これではいけない。そういう者にかぎって不平をいい、少し不平が通らず自分が困ると、すぐに死にたいとかやけくそになる。こういうような人間を何ぼつくったところでダメである。

### 三、 順序

も一つ智の方の教育といえ、これは順序を教えること、区別を教えること、物と物との関係を教えることとであります。部分部分を小さく解剖したり比較考究する方、これはものの順序を教えること。順序という言葉を使ったのは、人間はどうしても上と下の区別、左右の区別、天地の間でも序というものがある。序というものがわからぬと、自分と他人との対立関係がわからぬから阿呆なことをしたり、ほんとうの生活、ほんとうの向上というものが出来にくいのであります。自然界の方の順序を調べることは現代でもだいぶさかんになっていますが、人事上においては、この順序ということが思想的にだんだん乱れてきております。われも人なり、他人もひととなり、中心もへつたくれもない、個人的な一列平等的な考えが、西洋の学問の中毒をうけて、近ごろ若い人々の気持ちの中にはいつている。だから、教育を盛んにするほど、学校を建てるほど、道理のわからない人間ができてくる。

細目に分ければいろいろ出来ましようが、私はこの感恩、鍛錬、順序の三つは天授の真理の中で間違いない、時と所と人とを問わず、どこにほどこしてもよいものであると信ずるのであります。そういう大局的な見方、案、策を立てずに、楊枝で重箱の底をほじるような教えのみに力を入れている。これでは世の中がうまくゆくはずはないと思います。こういうものを含んだ科学ならこれはほんとうの教である。が、今の科学はこの中の順序、智にかんする或る部分だけをいうのであるから、今の科学は行きづまっている。またそれにのみ囚われており遍している人、社会というものは良いものではない。みな苦しんでいるのであります。

要するに祭政一致、祭教一本の根本義に目ざめることが最も肝要なのであります。

### 慣の意義

慣と申しますのは、天人道の常で、真理が型にあらわれたものであります。

慣は万物運化のそれぞれの軌道定型でありまして、大きい意味でいいますれば、地球と太陽、大宇宙と太陽系、みな慣によってたまたたれ、一定の軌道を歩んでいる。四季の循環もいっさいのものの生成化育の過程も、ことごとく慣ならざるはない。

また、人間相互の関係も、五倫五常の道によって平衡がたまたたれている。それも慣であります。国々の法

律、伝統、習慣なども時、所、位によって多少、その趣は異にするといえども、その時代、その地方における一定の軌道であつて、たとえば、人道上の孝とか愛とかいうことを一つの理としても、そういうことを理屈で赤児に教えても、赤児はあくびをするか、泣き出すかするだけである。そういうことをせんでも、赤児は母親が恋しいという本能愛がある。慣の上から、赤児に愛を教えようと思えば、論語を読んで教えようとしたらむつかしい。ああせよ、こうせよというようなことを言わずに、母親が乳を吞ましてやってさえおれば、赤児は覚えてゆく。簡単なことをやっておればよい。簡単であるが大事である。

人を仕込むにも、教えを先にしたらわからぬ。型からはいらせなくては身にしまない。真理に導くためには、慣ということは非常に大事なものであります。ところが、人により、所により、時によって同じ真理でも形が変わってくる。日本と西洋では、ある一つの理屈でも形にあらわす場合には、西洋人は西洋人らしく、日本人は日本人らしくあらわす。

また時代が違つて慣がちがつてくる。おなじ水泳法でも、川で練習している人は川に相応した泳ぎ方になつてくる。であるから、慣に執着してはわからなくなる。

案外、たたき込まれた人、ある型にはまり込んだ人は融通がきかない、窮屈である。自分一人の定型のみこだわっているから、それ以外のものは悪いように思い、間違っているように思いがちである。一面の真理を出した型にとらわれて、普遍的な理というものがわからぬからである。

子供に、毎朝、顔を洗わしている。それは、理屈を知らないで洗っている。自覚すると、これは、きれいにするためだということがわかる。清潔が大切だということがわかり出す。形の上で清潔をおぼえれば、心の上の清潔も大事であるということも、しまいにはわかってくる。心の清潔がわかれば最後は神へまでもゆくのである。

すべて初めは慣でみちびいて、それから「教」へ入り、最後は「祭」へ入らしむべきである。慣の境地をへずに、理に入り、教にはいると、かえつて浅薄な頭だけの、記憶だけの人間ができ上がつて役に立たない。慣から仕込むことが必要である。慣から教にはいらねばならぬ。教にはいつても、つぎつぎに惟神の大道を会得してゆこうとすれば、どうしても神さまに來ねばならぬ。祭によって神慮との和合を得なければならぬ。

慣というものは、そういうものでありまして、人間の毎日していること、顔を洗うとか、ご飯を三度食うとか、そういうことも今の世の慣である。理から、教からいえば、なにも顔を洗わねば神さまに近よれぬわけでもない。一遍くらいとばしたところで罪悪でもない。ご飯を一遍食おうが、二遍食おうがどうでもよい。そんなことが神慮でもなんでもない。ただ、いまの慣がそうしているだけである。十二時にくうべきものがあるとうふうにきめてしまうと、生活が非常にわからなくなりヘンな人間になる。未開な世ほど慣に執着する傾向がある。また未開な人ほど慣にかたまつてしまう。慣を無視せよというのではありませんが、慣というものは、時により所により、人により変わるものであります。悪い慣もときにはのこされる。昔のしきたりとか、ならわし等の中には、良くないものもあるかも知れない。それは、その時代の精神が現れている。大局からいえば、やはり、大きな神慮の発展の過程である。

ここでもう一つ申し上げておきたいのは、慣には心の慣と形の慣がある。以上申しましたのは形の慣であります。心の慣、これは人によって非常にあつさりとした性質の人もあり、ものを非常に注意深く見る人もあり、また、ある何かに対して引きつけられる人と、引きつけられない人とある。それはクセである。よくクセもあり悪い癖もある。形の慣を変えようと思えば、心の慣を変えねばならぬ。人にすかれないう

のは、心にそういう要素を持っている人である。ただ形を丁寧に變えてみても役に立たぬ。何か不幸がつきまとう人がある。それには、何か自分に要素、要因というものがまつわっているからである。それをかなぐり捨て、とつてもらわねばうまくゆかぬ。その慣にはよほど努力し、また、以上の力をお願いしなければ心の慣は改めがたい。形の慣ばかりでなしに、心の慣、クセを省みて注意しなくては進歩しない。案外、それに迂闊である場合が多いのであつて、それは大事なことであります。

自分の悪い慣を一つ直した人は、大変な宝の塔を建てた人、一つの世界を改造した人といつてもよいのであります。人間の一生は、ある意味において、慣を直すことである。悪い慣をなおし、良い慣をますことであります。心の慣を大事なことと思わず、それを直すことに努力せぬ人は、おなじ所ばかりを歩いてちよつとも進まない。形の上においても受けるところが少ない。

慣も常理の定型をいろいろやることによって、普通の真理を会得してゆくのであります。たとえば大工さんがカンナを再々使っているうちに、こういうふうに使つたらよりというふうに、慣をたくさんやっているうちに、呼吸や要領というものが呑みこめる。人間の進歩の順序は「形から理へ、体的から靈的へ、小乗から大乘へ、部分から普遍へ」得てゆき悟つてゆくものであります。

いまの学問は、はじめから理屈を言い、はじめから高尚なことを教える。いろいろわかっているようで何もできぬ。とらわれており徹底していない。身にしみていないからであります。いろいろ型をたくさんやっており、型の理を会得してゆけば、普遍的な神慮に行き、世の中というものがわかりだしてくる。そういう意味から、いろいろな事にあたり、いろいろな人に接して、何やかや、失敗でもなんでも、骨身をおしまずやっている人は、ずっと進歩して、しまいには、神というところまで来ざるを得ないようになる。それをせなかつたら、ほんとうの神へは行けぬ。ただ形だけの神さまですんでしまう。形を粗末に思い、なんでもなように考えるやり形は間違いであります。十分、形をおぼえ、形を仕込んで、はじめて教にゆき、祭にゆくのであります。

人間が成長してゆく上においても、はじめは、体が大きくなる。子供の時には、大きくなるのは体ばかりです。心もちつとは大きくなるかも知れぬが、まず最初は体がととのつて、それから今度は哲学的になり、大人の世界へはいつて行くのであります。体が、まずできて靈ができる。家を建てて、人がはいる。この世の中の文化でも、物質文化ができてから、今度は魂がはいるのであります。大局からいえば間違っていない。神さまの神慮でありまして、まず、形のほうが整つて、つぎに魂がはいるのであります。子供の時は、玩具をもつてママゴトをしたり、お母さんゴッコをしておつて、大きくなれば、それが本当のものになるのであります。親子の愛が、友には友になり、神さまには敬になるといふふうに、だんだん広がってくる。

つまり、慣というものは大切なものであるが、吟味しなくては悪い慣もあり、国より、時代によつては悪い慣もある。悪い慣を捨てて、よい慣を作るようにせねばならぬ。そういう自覚的努力をするということが大事である、ということを示したのであります。

ここでちよつと申しておきたいのは、(宗教的の意味の)教そのもの、天授の真理というものは普遍的の、間違いない愛を説き、善をすすめるに過ぎないのであります。しかし時代がちがひ、宗祖、開祖がちがひ、周囲環境がちがひければ、いわゆる慣によつて、なんとなしにいろいろ変わってくるが、もとは一つであります。決して、それではなくはならぬというふうなものではない。われわれは決して、一宗一派を説いているのではなく、ほんとうの根本の道、惟神の大道、いわゆる世間の宗教とか宗派とか、そういうものを

超越した大きい境地から、真の惟神の道はこういうものである、ということをお話ししているのであります。

それぞれの慣わしというものは、国より、人によつては尊重すべきである。しかし、中には、時代の済んでいるものもある。人間の智慧の方が進んで、もうかえりみられなくなつておつても、それに執着している教もある。これでは人に倦かれ、受け入れられないはずである。ほんとうの教が残らずに、また、祭が残らずに、慣だけがのこつている宗教が多い。だから、殿堂が立派であり、信者が大勢おり、学問はしておつても力がない。教も祭も本当のものはないということになっていてあります。いまの既成宗教の多くのものには、ほんとうのまつり、神慮にふれ、神慮を感じる人がごく少ない。また、ほんとうの普遍的な教えの立場からものを見てゆき、おこないを行じているという人が割合少ない。はじめの宗祖は、そうでなかつたのですが、宗祖がのこしていった大乘からいえば、とるに足らぬ、どっちでもよいようなことに執着している。アーメンと唱えねばならぬ、南無妙法蓮華經といわねばならぬと、神さまや仏さまがいわれるはずがない。日本であら、日本の慣に従うのが一番自然である。しかし、ほかの国まで、今すぐそうせよというようなことは、それは偏狭な教であります。

動植物は、一度通つた道を、他によい道があつても、かならず通りたがります。動物や植物はほとんど慣のみによつて生きている。教までの進歩は、人間でないと（動物でも、ごく人間に近い高等動物でないと）できません。いっばんの動物および植物は、慣の度に属しているのであります。

### 造の意義

造は自分の思うままをつくること、創造すること、自己の自発的衝動のままに行うこと、ここでは、適宜の動作と名づけたと思います。これは人間ばかりではありませんが、自由意思のある人間には、いちばん造といふことが多いと思います。とにかく、慣や教、そういうものに囚われないうで、奔放にやつてゐる動作であります。赤ん坊はフトンに寝ておつても小便をする。フトンの中ではできぬというような慣には囚われぬ。どこでもやる。十二時にならなくても腹がへれば、アンアンと泣きだし、腹がたてば怒る。大局的には、慣に影響されており、この世の風情にまじわつておるのは仕方がないが、赤児は造の境地であります。いわんや、慣もなければ祭もない。しかし、そういう動作をおこさず元、衝動、力は、これは、赤児の前生にありといおうか、遺伝にありといおうか、先天的生命力といおうか、決して、赤ん坊がそういうことを発明したり、考えだしてやつてゐるのではないが、それをそうさせる力がある。しかし、赤ん坊はそれを自覚せず、自分で適宜の動作をしてゐるに過ぎぬのであります。

案外、造と祭は似ていることが多い。祭は神の心との和合を自覚して神さまを信じ、神さまをいつてゐる境地であります。造というのは、そういうことは知らぬが、この世にはすべてを良くしよう、生を愛し育ててゆこうという力があるから、赤ん坊自身は、その中に素直にはいつてゐるだけであります。純な、そういう良い氣に使われ、守護神に使われ、本守護神、正守護神に直属しておつて、自我というものはつきりしていないから、ただ据えつけられた機械同様で、それを操縦してゐる或る目に見えぬ力のままに動いてゐる。だから、慣や教ということは知らなくても、案外、慣や教にある人よりも朗らかな生活をするものである。しかしそれは、赤ん坊自身でなくて、うしろから操られてゐる人形にすぎない。しかし、だんだんと慣や教にゆかねば、ほんとうに自覚しての祭の境地までにはゆき難いものであります。

また造というものは慣を作り出す。悪い慣があると、慣のみに支配されるのではなしに、自分で、この慣

は悪いということを見出し、悪いのは捨て、良いのを取り入れる。それで、新しい慣は造によって作り出すことができる。であるから、造というものは、人類においてもつとも特徴がある。動物は、ある意味で、造の時代もあります。慣を破る力はない。慣を破る力は造にある。造は慣の瞬間的、部分的動作であり、慣の一部分とみてもよいのであります。

自由意思というものが人間に与えられているということが万物の霊長たるゆえんである。造を悪く利用すると、悪い方の慣ばかりを作ってゆく。今の世は、ある意味で、そういう傾向があるのであります。造をよく利用すれば、ドンドンよい造を重ねてゆき、造が重なれば、そこに慣ができ、ほんとうの向上的階段を上ってゆくことができるのであります。

で、人間をして、造を行わしむる力、いわゆる本能、背後の先天的な石、力、ここに人間が思いをおかぬと、それが単純に自分にあるように思っていると、大きな間違いであります。また、恩とか犠牲とか、奉仕とかいうことがわからなくなる。また、自分というものが、勝手に生まれ、勝手にふるまえ、自分の世の中のように自分を主として考えがちになる。これではいけないのであります。

俗に本能といいますが、むろん、自分の過去におけるいろいろな経験もありましようが、それ以上に、ものをよくしてゆき、発達せしめようとする意思、われわれから言えば、神さまのみ心、お力というものが、一様に加わっており、こもっておる。ですから、本能というものは大切なものである。ただ、それを悪い方へ沈淪させ、おぼれさすことが悪いのであります。ご飯を食べるということ、なんとはなしに腹がへったという感じ、それは自分らがしたのではないし、先祖がそうさしたのでもない。一切の元のもの神慮にゆかねばわからないのであります。本能によって――たいていは本能を自覚せずに、あるいは、大きくなれば自覚しますが――動いているのが造であります。

以上で、大体、祭教慣造が、どういうものであるかということがおわかりと思います。人間がこの世に生まれて、生活してゆき、向上してゆく上において、この四つの度合があり、階級がある。神慮というものは、直ちに人間に流れ入るものではないが、教となって人間を導いておられ、慣となつて、また造となつて人間を導いておられます。これは人間ばかりでなしにすべてであります。

神慮というものを簡単に考えて、みなが神さまに接し神さまが見える、階段を経ずにそこまで行くように思っているのは間違いでありまして、そういうことは自覚しているといないとにかかわらず、一切のものは、この四階段の中にもないものはない。それをわからず範囲が、それぞれ相応している。人間に相応してもうしますれば、嬰兒の時代、幼児の時代は造の時代で、ただ本能のまま動いている時代であります。それが多少、社会というものに接触し、社会というものの中にはいりこんできだすと、そうはいかぬ。習慣があり、法律があり、儀式があり、伝統がある。その人がよかろうが悪かろうが、氣にいろいろがいろいろあるまいが、とにかく、人類一般、社会全体が洗練し、ふるいにかけて慣というものがある。それに突きあたる。社会生活にはいるほど、慣というものを度外視するわけにはいかぬ。慣をはずすと奇人のように思われ、変人に思われる。しかし、先覚者は、案外、この慣をやぶり良い慣に変えるために、造の力を働かしてゆくものである。そして、社会の風習、伝統、周囲の環境、そういう慣の中にはいつてしまつて、そこまで一生をおわる人々が案外多い。それは動植物とおなじ境地であつて、あんまり変わつてはいない。朝おきてご飯をたべて、寝て、本能のままに金を儲けて、ただそういうことをしておつて、そのうちに死期がくる。死にたくないと思つても仕

方がない。そしてフツと消えてしまう。ちっとも自分を吟味し、世間を味わわないでおわってしまふ。野蠻人はこの程度である。文化人ほど教までゆき、真理というものに住するようになるのであります。

造の時代は我に住する時代、慣の時代には型に住し、教は理に住する時代、祭は神さまに住する時代で、こういう具合に四段階があります。人間の一生に相応して考えてみればよくわかる。赤ん坊の本能の時代がすむと、こんどは社会の風習とか、規約とか約束とか、そういうものにはいり、こんどは型である。それに住するようになる。型というものは、悪いものはだんだんふるわれて良いものが残るようになる。それがすむと理に住する。その時には型を少々批判できるようになる。しかし、ほんとうの真理を得ようとするには、人間理智ではダメである。より以上の力を求めて、それを感じるようになるのは祭に住する時代であります。要するに、神慮を実行し、神慮に生きていくことになり、一切は、それに背くわけにはいかない。そういう具合に、本能を元として、つぎつぎと慣に入り、教に入り、祭に入る。それは、下から発展する道であり、力であります。それは万物に備わっておって、この世にみちみちている。これは神皇産霊神のお力なのであります。

また神慮というものは、直接に人間へも下ってくるものである。それがなかったら、この世はたまたれない。それから発したいろいろの光があり、熱があるから人が生きてゆける。上から降りてはぐくんでゆく力、それが高皇産霊神のお力なのであります。上から下りてくると、下から上がって行くのと、この両方の力で、この世は生成化育をとげているのであります。

## 二、五倫五常

「五倫」とは、人として守るべき五つの道（孟子藤文公篇）

一、父子の親（お父さんお母さんの言いつけをよく守り孝行すること）

二、君臣の義（君主と臣下、主人と使用人の義理人情を言う）

三、夫婦の別（夫婦仲よくする事）

四、長幼の序（目上の人を敬う事）

五、朋友の信（友達と仲よくする事）

「五常」と言うのは、儒教の五徳目（孔子・孟子・荀子）

仁・義・礼・智・信の、五つの教えのこと。

即ち

「仁」とは、いつくしみ・慈愛・仁愛・なさけ・思いやりの心を言います。

「義」とは、正しいこと・正義道になかったこと。

「礼」とは、人と人との間にふみ行われるべきみち・礼儀作法・立ちふるまいのこと。「智」とは、知

恵・さとり・賢い人ということ。

「信」とは、誠・うそでないこと・信用のあること。

この五つの教えを五常と言います。

祭—惟神の大道

祭（祈願）

眼に見えぬ己が心靈を眼に見えぬ神にささぐる幽齋の道  
見るを得ず聞く声もなき神のまへに祈る心は神なりにけり  
善きにつけ悪しきにつけて天地の神にいのるは人の真心  
雷電のはげしきときと地震の揺るとき神に祈らぬはなし  
天地を祈るころは人草の道にかなひしまことなるべし  
手を拍ちて祈るはよけれ皇神の心汲まずばいさをしもなし  
いのるとも心に曲のある時は神の救ひの如何であるべき  
世のためと祈る真人ぞすくなけれ底の心はわが身のためのみ  
太祝詞ながなが称え私利をのみ祈るは誠の信徒にあらず  
礼なくて黒き心もつ人のいのる言葉にしるしあらめや  
むらきもの心きよめて大前に祈るまことを神は受けなむ  
心をも身をもまかせて祈りなば神はまことの力たまはむ  
大前に朝夕いのる神言にひらけゆくかな心の闇の戸  
天地も家もわが身も人の身も清めきよむる神の祝詞  
真心をこめし祈言みじかくも恵の神はきこしめすらむ  
今日もまた真幸くあれと大前に心きよめて祈る人の世  
惟神靈幸はへませと大神を祈る言葉のすがすがしかも  
皇神の御前にまをす言の葉は清く美しく称へまつらな

祭（感謝）

宮柱太しき建てて幣帛をささげまつるを顕齋といふ  
神殿に神はまさねど人々の齋かむたびに天降りますかも  
あし原の瑞穂の国は天地の神いつかずば治まらぬ国  
天津御神国津御神を齋かずば世はいつまでも乱れはてなむ  
神々の恩頼にむくいむと御祭りするは御代の国風  
天地の神のめぐみに生ひながら神を齋かぬ人の多き世  
起臥のその度ごとに思ふかな海より深き神のめぐみを  
人の親の愛と恵はかぎりあり限りなきこそ神のみめぐみ  
言の葉に称へつくせぬ皇神の恵にむくふすべもなきかな  
皇神に初穂ささげて御恵の千重の一重にむくいまつらむ  
皇神に捧ぐるものはことごとく神より受けし御賜なり  
大前に供へまつらむものもなしただ赤心の清きのみなる  
ちはやぶる神の祭りを第一につとむる家は永久に栄えむ

朝夕に神のみ前に大祝詞となふる家は安らかなりけり  
ゑらゑらにゑらぎ賑はふ人の家は朝夕神の御前にぬかづく  
礼拝をいそしむ人は愛善の道をたどれる神の御子なり  
目に見えぬ神の御姿朝夕に拝みつかふる吾となりけり  
一日の業なしをへて大前に祝詞まをせばころすがしも  
一日の業ををはりしたそがれに御前にいのる心たのしさ  
吾もなく現世もなくただ一人神の御前に平伏しをろがむ

### 産土神と祖霊

産土の神の御前におのおも御栄えいのる神国のたみ  
ふるさとの産土神をたふとみて道に仕ふる人のつましき  
寝いるまも人の身にそひ家に添ひ心にそひて守る氏神  
氏神は祖先の霊と知らずしてから神いつく人の多かり  
遠つ祖の御祭事をうるはしく仕へまつるは御代の国ぶり  
祖祖のいづの魂を春秋にいつきつかふる神国の道  
とつ国の式あらためて霊幸はふ神の御式に祖霊いつかな  
累代の祖先の霊を天国にすくふは子孫が愛善の徳  
遠津神代々の祖たち斎かずば人も獣とかわらざるべし

### 惟神の大道

いろいろと世は紫陽花の七変化かはらぬ道は惟神の道  
迫り来る世の荒浪をやすやすと風ぎて治むる惟神の道  
人の子の朝な夕なに守るべき務めは神にしたがふにあり  
かむながら神の心にまかすこそ人の誠のつとめなりけり  
かむながら誠の道は大衆のこころに通ふ真道なりけり  
惟神道のまことの尊さは踏みてのちに悟りこそすれ  
惟神まことの道を悟りつつ行ひなさばこの世やすけし  
私利私欲一さい捨てて惟神かみの大道にすすむべき時  
かむながら道の光を地の上にあまねく照らす時は来にけり

### 教―天授の神理

#### 教

教とは人の覚りのおよばざる天地の神の言葉なりけり  
現し世のすべての人に霊界のさま教へむと神出でませり  
人みな夢にも知らぬ神事をさとすは神のをしへなりけり  
ゆるぎなき神の言葉はあななひの救ひの道のもとゐなりけり  
大本は宗教にあらず神ながら天授の真理説く道にぞある  
人生の悩みをすくふ光明は三世貫通の神のみをしへ

教育や政治芸術一さいを指導するこそまことの教なる

大本は政治経済宗教や教育の根本たてなほす道

乱れたる世をなほさむと祈るこそわが大本の教なりけり

大本は霊もて霊の道を説きパンもてパンを説く御教なり

霊と肉一致和合のみ教は三五の道おいて他になし

大本も三五の道もおなじ意義の神のさづけし称へなりけり

大本の神のをしへは人みな習ひてすすむ誠の道なる

大本の神の教は烏羽玉のやみ世をあかす光なりけり

釈迦孔子も覚り得ざりし神言を覚すは大本の教なりけり

### 愛善

大本のをしへの根源たづぬればただ愛善の光なりけり

神を愛し人を愛する大道はわが愛善の教なりけり

神と言ひ仏といへど根本はみな愛善の別名なるべし

愛善の道につとむる大本は神とほとけの区別を立てず

既成宗教あまたあれども愛善の二字を捨つれば何もものもなし

愛と善のぞけば宗教道徳ものこらず蟬のぬけ殻なりけり

宗教は理屈にあらず情なりといふ真諦を知らぬ痴者

愛善の真心もたぬ宗教家のいかで世人を救ひ得べけむ

うつし世をいとふ教は栄えゆく神の御国にそぐはじと思ふ

さへづるや体主霊従の教をあやまりて世人の心悪しくなりゆく

キリストも釈迦も孔子も哲人も弥勒出世の先達なりけり

古今東西聖者の説をとりまとめ活かすは弥勒の働きなりけり

宗教は時所位によりて変りをればわれは時代の宗教を説く

真正の宗教解する者ならば吾が愛善の道につどはむ

ときどきの国の法度も時々神の御教ぞ夢なたがひそ

### 神書

大本の道の宝は他の教にたぐひもあらぬ神書なりけり

筆先に示したまへる教言はみな天地のかがみなりける

繰り返しくり返し見よ伊都能売の敵の御教をしるされし書

こころして読めよ靈界物語みろく胎蔵のうづの神言

いく度も繰り返し見よ物語神秘の鍵はかくされてあり

見るたびに畏さまさる神書は神の御国のたからなりけり

神の書ひもとくごとに新しく思ふは神の恵なりけり

神つ代の事つばらかに記したる書読むたびに神を悟りぬ

かくり世のこと細やかに記したる書は靈魂の力なりけり

苦しみの深き谷間に落ちしとき救ひの綱となるぞこの神書

むらきもの心の塵をはらはむと暇あるごとに物語よむ  
皇神にいのらざりせば百千たび読むも悟らじ神の御心  
魂さへ曇りしなくば千早ぶる神の教の写らざらめや  
家業のせはしき人も玉ぼこの道ふみ学ぶ暇はあるべし  
学ばねば人はこの世の盲目なり神の学びはなほさらのこと  
常識は神の誠の道まなび得たる智慧より何ものもなし

#### 古典と靈学

いそのかみ古事記は神つ代の神のいさをの証明なりける  
いそのかみ古事記の神髓をつぶさにさとす大本のみち  
神つ代の神の御典を明らかにす本つ大道に世人をみちびく  
世の中の遷りかはりをまつぶさに書き記したる貴の国典  
いそのかみ古事記の神言をいま繰りかへす世とはなりけり  
古の書見るごとに皇神のふときいさをの仰がるるかな  
靈学は心をきよめ身を練りて世人をすくふ神のまさわざ  
靈学の術まなばむと欲りすれば冤かく心の根城かためよ  
靈学をまなぶは良けれ吾が心あらひ清めしその上にせよ  
靈学をまなぶ目的はむら肝の心の岩戸ひらくためなる  
うかれゆく魂を招きて丹田にをさめ生かすを鎮魂とふ  
言靈の道の真実は千早ぶる神の稜威のをしへなりけり  
言靈のさちはふ国と言ひながらその言靈を知る人ぞなし

#### 慣—天人道の常

##### 慣

ひさかたの天津御神のみこころは人の魂の基なりけり  
さもむかふ人のこころは天地の神のまにまに動きこそすれ  
天地の神にならひて玉ぼこの道ふみ行くは人のまさわざ  
天地の正しき道を踏みしめて歛ぎむつまひ御代に仕へむ  
天道にしたがふものを善といひ逆ふものは真の悪なり  
五倫五常の道は人間特有の生まれしままの慣性なりけり  
良からざる習慣日々に重なりて生まれながらの天真失ふ  
五倫五常道かげひそめ政治また権謀術数の世とはなりけり  
徳育を忘れて智育におぼれたる報いは地上の乱れとなりけり

#### 五倫五常

子を思ふ心うつして親おもふ人は誠の神の御子なる  
両親のこころ安めて孝ふるはまことの人の鏡なりけり  
老人をめぐみ敬ひ妻子をばいつくしむこそ道にかなへる

若草の妻子奴婢をあはれみて心をつくす人ぞひとなる  
家のこと妻にまかせて世のために尽すは夫の誠なりけり  
家のうち治めまもりて背の君の心いやさむ妻ぞかしこき  
家のうちをさむる妻の心得は目上目したの中臣なるも  
家の内ゆたかに平和にをさむるも妻の心の梶ひとつなる  
高砂の尉と姥とは那岐那美の二尊の具体化したるものなり  
何事も神にしたがひ進みなば妹背の道も久しかるらむ  
二世ちぎる夫婦の仲も踏みてゆく道しちがへば憎み争ふ  
家の妻よし悪しくとも真心をもちてのぞめば良妻となる  
育てよき女性は心うるはしく貞操正しきよき妻となる  
人の子と生まれし者は身を修め道を守りて親をあらはせ  
いつくしみ敬ひむつぶ兄弟は親のこころをなぐさむるなり  
いとけなき弟妹をあはれみて救ひたすくる兄弟の道  
父母にうやまひつかへ姉妹にならひて行くぞ弟妹の道  
あやまたじ犯さじものと相互にも諫めかはすは朋友の道  
皇神の道につどひし友がきのその交はりは永久かはらず  
皇神の教にまじらふ友垣は兄弟よりも親しかりけり

### 親と子

子を産めば初めて親の名も生まれ家の資格も高く生まるる  
過たじ汚さじものと生の子を心にかけていづくしむ母  
漸くに世に立つ身魂となりぬれば母の恵みを忘るる凡俗  
垂乳根の恵みの胸にいだかれて哺育まれたる昔わするな  
むらきもの心を千々にくださったる報ひありしと喜ばせ母を  
世の中に貴きものは沢あれど得し子宝にまさるものなき  
貧しきが中にはぐくみ育てたる子は寶石にまさりて貴し

### 造―適宜の事務

#### なりはひ

人はみな身魂に合へる造あり神にならひて道をはづすな  
士農工商の道つたへゆく大本はくもりたる世の光なりけり  
世の中はおのもののおのもの家業をつとめ励みて栄えこそすれ  
信仰と誠意と努力なき時はいかなる事業も栄えざるべし  
おのが身の力さとりて事なさば過つことの露だにもなし  
うつし世の勤務おこたる曲人は神の御国のつみ人なるも  
朝早く起きいで業にいそしめば神の助けは自ら添ふ  
幸おほき生業なりとも皇神の御許なくば吾はなすまじ

朝夕に御前に祈り業をなせばいと安らけく進みゆくべし  
現世の事業さへ全くできぬ身の神の御業に仕へ得べきや  
顕世は神の御国の田畑なれば畏れつつしみ日々にはげめよ  
よき種子を神の畑に蒔くならば豊にみのらむ千かい八千かい  
狭田長田高田窪田に種物まきて育つるおほみたからはや  
人みなof生命の種と朝夕にはたらく田人世のたからなる  
さもむかふ心つくして世のために幸ある品をつくる飛驒人  
商人は正しかるこそ道なれや勉めはげみて御国を富ませ  
朝夕に汗して働くなりはひの中にこもれる宗教のひかり

### 経済

経済の根本革正なざれば地上の国はほろびゆくべし  
自然界の元素を採集利用せずば人生無意義に終るものなり  
天地の中にとありとし在るものは神のあたへし宝なりけり  
生活になくてかなはぬ物はみなこの世の中の宝にぞある  
ありとある地上のものは悉く火水土より出でざるはなし  
火と水とつちの御徳知らざれば真の更生効を奏せず  
お土からあがりし物を大切にせざればこの世は治まることなし  
お土からあがりしものを大切にせよとの謎を知る人はなし  
一さいの生産品は地上より更生もまた土よりはじめよ  
あらがねの土は万有産出の基なりせばおろそかにすな  
野に山に神の恵みは満ちたらふ人よまことの鍬もちて掘れ  
御教のしげり榮えて国民のかまどの煙しげき世待たるる